

[公演ノート]

音楽科教員養成における表現力を引き出す指導法

—ポルトガルの音楽施設カーザ・ダ・ムジカの研修より—

The Instructive Method of Drawing the Ability of Expression for Music Teachers

—From the Workshop Experience in the Musical Facilities Casa da Musica in
Portugal—

渡辺明子

Akiko Watanabe

〈抄 録〉

筆者は東京文化会館の音楽ワークショップ・リーダー(以下WSLと略す)をしている。2016年3月、ポルトガルの音楽施設カーザ・ダ・ムジカ(以下カーザと略す)にて一週間様々な音楽ワークショップ(以下WSと略す)を見学および体験した。WSLとしての技術・指導法はもとより、学校教育とアウトリーチ活動の連携について改めて考えさせられた。これから継続して研究を進めていきたい領域である。

本稿では、研修中に見学した数多くのWSの中から、児童生徒にかかわる1公演に焦点を当て、WSLとしての技術・指導法と音楽科教員養成での指導法についての共通点をあげ、これからの教員養成にいかしていきたいと考える。

キーワード：ワークショップ・リーダー、アウトリーチ活動、音楽科教員養成

Abstract

I am a musical workshop leader in Tokyo Bunnkakaikann (abbreviated WSL in the following). In March 2016 I visited Casa da Musica, one of the musical facilities in Portugal and experienced various workshops for one week there. It made me reconsider the cooperation between school education and outreach as well as the method of teaching in WSL.

In this report I will focus on one of the performances that I experienced in Casa da Musica, which is concerned with school children. I will point out common aspects between the WSL teaching method and that of music education and utilize them for future teacher education.

Keywords : workshop leader, outreach activity, music teacher education

1. はじめに（日本におけるアウトリーチ活動の現状と課題）

文部科学省は、2010年5月「コミュニケーション教育推進会議」を設置し、子どもたちのコミュニケーション能力の育成を図るための具体的な方策や普及のあり方について議論を進めるとともに、文化庁「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」のメニューの一つとして「児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験」を展開している。芸術家を学校に派遣して、学校の教育課程に芸術表現体験活動を効果的に結び付けた計画的・継続的なワークショップ型の授業を展開するというものである。アウトリーチ活動に国が乗り出しているということであろう。

1990年代後半にアウトリーチ活動が日本の学校教育に盛んに導入され始めた。アウトリーチ活動の先行研究には、財団法人地域創造などの団体、各地域の文化施設、音楽系大学の研究施設、音楽関係の学会などからの報告書や、脳科学や教育者・教育研究者による研究論文が多数ある。

その中で、(財)地域創造の報告書「新・アウトリーチのすすめ」(2010)によると、今ではその活動も定着してきたといえるが、課題も見え始めているという。同様に岡部・鈴木は「学校と演奏家の連携による音楽教育の可能性」(千葉大学教育学部研究紀要 第58巻)の中で、「現状においては、アーティストが研修を受ける機会は少なく、動機や意識、手法にも幅があり、その質を問うことは難しく、演奏者本位であったり、娯乐的で心に残るものが少ないアウトリーチも一般的には存在する可能性もあることを指摘しておきたい。」と、課題が見えてきたことを述べている。

これほど盛んになってきたアウトリーチ活動についてのこれからの発展を考えると、大きく2つの課題があげられるのではないだろうか。①アウトリーチ活動を行う演奏家の教育的技術不足②学校現場と演奏家を結び付けるコーディネーターの人材不足、である。

2011年より文部科学省は、この児童生徒のコミュニケーション能力の育成を図るため、専門的な知識を持った人材育成をするための「ワークショップリーダー人材養成研修」に事業として着手している。

本論文は、現在の課題として上げた①の演奏家の教育的技術不足について、WSLとして演奏家を育成するプログラムを取り上げた。さらに、その育成研修の内容と教員養成に共通点を見出したことを述べ、これからの教員養成での指導法を考えることを目的としている。

2. 東京文化会館のWSL 育成プログラムと、ポルトガル音楽施設カーザ・ダ・ムジカとの国際連携

2.1 カーザ・ダ・ムジカについて

「この音楽施設は2001年にポルトが欧州文化首都に指定されたことを記念し、音楽による創造を目的としたポルトガル初の音楽専門施設として2005年に開館した。“音楽は芸術であると同時に人々の心の豊かさを育むもの”という信念のもと、あらゆる人に豊かな音楽体験をしてもらうことを教育プログラムの使命として掲げ、地域に根差した活動や市民が積極的に携わるプロジェクトを展開している（「東京文化会館ミュージック・ワークショップ」2016年1月発行パンフレットより抜粋）。」

東京文化会館は、このポルトガルの音楽施設カーザと連携し、2013年に独自のミュージック・エデュケーション・プログラムを立ち上げ、WSLの育成に乗り出した。WSL育成プログラムでは、カーザのWSL指導のもと、グループごとに分かれて0歳から大人向けと、様々な年齢を対象としたWSを創作・制作し、実際に公演をしている。また、講師により選出された受講生はカーザで派遣研修を受けている。

2.2 研修と派遣の目的

カーザのWSLたちを講師として迎えた東京文化会館におけるWSL育成プログラムを経て、現地（ポルトガル国ポルト市）で実際に行われるWSを体験し、習得した知識と経験を今後の日本でのWS活動に活用する、ということが派遣研修の内容と目的である。

つまりこの育成プログラムは、単にポルトガルから講師を招聘し講座を開き、受講生を募って提供して終わるという一過性のものでなく、日本で手ほどきを受けた同じ講師により、派遣研修先のポルト市で彼らの行うWSの実際を体験し、そこで得たものを日本での活動に生かすという、一貫性・継続性を持っている。これからのアウトリーチ活動に対し、内容もさることながら、WSLの育成の面でも他よりも一歩先を行く事業になっていると考える。

筆者は養成校にて、保育者（幼稚園免許、保育士資格）、さらに小・中・高の免許・資格取得のための授業に携わっている。この派遣研修で、WSLとしての技術・存在意義・指導法を学ぶ中で、音楽科教員とWSLの共通点を見出し、さらに教員養成に大きなヒントがあると感じた。

カーザでの研修中に見学した数多くのWSの中から、児童生徒を対象とした1公演に着目し、教員養成の指導法について述べる。

3. WS概要（「School singing」）

3.1 「School singing」の特徴

小学生、中学生、高校生と異なった年齢や学校の子どもたちが集まり、限られた時間（コンサートまでを含めておよそ2時間）の中で歌唱を中心とした練習・発表をする。その成果発表は、コンサートとして観客を動員して行うものである。

これはカーザが、学校向けに展開しているWSプログラムの一つである。学校側は、音楽的学習として、また学校行事（校外学習など）として、このプログラムを利用している。

3.2 参加者と観客

- ・日時…2016.3.11 午前10：30～12：00（コンサート：12：00～12：30）
- ・場所…カーザ・ダ・ムジカ内のリハーサル室（リハーサル室では一番広い「リハーサル室10」）
- ・曲目…ポルトガル伝統の曲、“Love love love”（ビートルズ）、“Love yourself”（ジャスティン・ビーバー）

筆者が見学した日は、小中高のそれぞれ異なった学校の、約1クラスずつの子どもたち111名と引率教員8名の参加者であった。WSLは4名（ピアノ、ベース、ドラム、フルートなど）が担当した。



（図1）WSLの打ち合わせ



（図2）小・中・高校生らがひな壇に上がる

コンサートの観客は、その日カーザの施設見学ツアーに参加していた一般人約65名である。

3.3 練習からコンサート本番に向けての流れ

- ①WSLの4人は、どのような内容・流れで、だれがリードしていくかを打ち合わせる（図1）。
- ②アイスブレイク（ウォーミングアップ）…全員が輪になり、WSLの動きを模倣する。手をほぐし、体のあちこちをボディー・パーカッションのようにたたく。簡単な動きから入り、未知の体験に向けて少し不安な心と体をほぐす。また同時に、これからWSに参加するという自覚と集中力を高めていく効果もある。
- ③ひな壇への移動…コンサート用に設置された3段のひな壇に、学校ごと（小・中・高生ごと）に並ぶ（図2）。
- ④ボディー・パーカッション…まずはリズム唱の練習が始まった。WSLの提示するリズムを、まずは全員で模倣する。リズム唱をボディー・パーカッションに移して練習する。WSLの誘導で、全体は縦割り3グループに分けられ、それぞれのグループで異なるリズムを練習し、ボディー・パーカッションの合奏が出来上がる。
- ⑤新しく知る曲の練習…1曲目はポルトガル伝統の曲であった。楽譜や歌詞カードを配布することはなく、すべてWSLの歌声からの聴き取りと模倣で歌って覚えていく。WSLは曲を短いフレーズに分け、何回も何回も繰り返し歌って伝える。この手法で、子どもたちは聴こえてきたメロディを反復していくうちに「合唱」になっていくのを体験する。以下2曲も同様に練習し、自分のパートのメロディを歌えるように練習した。
- ⑥アンサンブルソリストを選出…練習をしながら、その合間に歌のアンサンブルソリストを選出していく。自薦他薦を問わない。WSLは、練習開始から子どもたちをよく観察しており、出来そうな子どもや、やりたそうな子どもに声をかけ前が出るように促す。この日の参加者の中には、高校生でヴォイスパーカッションの得意な生徒が居て盛り上がった。また、引率の教員方にもアンサンブルソリストとして参加させていた。
- ⑦コンサート…練習の仕上げとして、観客を招き入れ、これまでに練習した3曲をコンサートとして演奏した。WSLの一人が中心になって指揮をした。ボディー・パーカッションの部分で簡単なリズム打ちは、観客にも参加を促し、全員で音楽を奏でた。リハーサルホール全体が音楽を通して一体化した。

3.4 実演を見て（WSLの役割）

手拍子によるリズム打ちにおいても、歌唱・合唱においても、練習し始めの時は全くといっていいほどそろわなかった。しかしWSLは子どもたちに対して、「そろえる」ことを要求することは一度もなかった。何回も繰り返していただくだけである。しばらくするとだんだんと自然にそろってくる。そろってくると一体感が出て空気が変わり、そこに「やる気」が発生してくるのが伝わってきた。何をやるのだろうかという疑問や不安の様子から、楽しんでいる姿への変化の流れが目に見えるようであった。「分かち合う心」（(財)地域創造の報告書「新・アウトリーチのすすめ」（2010））が養われる瞬間ではないかと思われた。

コンサートとして観客を招いて披露することは、子どもたちにとって演奏に対する努力が認められ、音楽的な評価を受けることに大きな喜びを感じ、それを原動力としてより深く音楽へ向かおうとするきっかけになっている。プログラムのねらいはそこにある。

カーザのWSLの一人は「参加者に技術の向上は求めている。それよりも大切なのは個々のやる

気だ。」と述べていたのが印象的だった。参加者の「やる気」を引き出すのがWSLの使命と彼らは考えているのだろうと推察できた。WSLとしての技術にはこの他に、的確な指示を与える、自由に表現していることを見守り、そして全体の統制をとる、ということが要求されていると思われる。

カーザの通常のWSプログラムは、WSLは2人組で行う。この日のプログラムのように参加者が多い場合は、WSLも4人と増えるが、常にリーダー間の正と副の関係がはっきりしている。活動の内容によって、各WSLの専門分野(楽器や歌唱)を活かしたメンバーが正となる。全体を統率するためには、この正と副の立場を明確にすることが重要である。彼らは綿密な打ち合わせのもとに、場面によっては臨機応変に、またごく自然に入れ替わっていた。ここにはチームプレイをするのに必要な、お互いの理解や信頼関係が十分にあるということの証しであろうと思われた。

WSLに必要な要素をまとめると、音楽的技術はもちろんのこと、アレンジメントやコミュニケーション能力としての臨機応変な統率力、人間関係(信頼性)であると考えられる。

4. 日本の音楽科教員に求められるもの

4.1 音楽科教員とWSLとの共通点

ヨーロッパでは「音楽」の授業がない国が多い。音楽は家庭の下に「お稽古事」として進められる。また教会へ行くことが音楽教育とも考えられている。研修地ポルトガルも同様であった。日本でも、長きにわたり「音楽」の授業時間数の削減やその存在自体について話題になっている。しかし日本の音楽教育は、学校教育の中で大事な役割を担っていることを忘れてはならない。音楽教育によって育まれる感性や情操は、知的能力の育成に結び付き、敷いては学習意欲に繋がり、更に「生きる力」「学ぶ力」を身に付ける効果があると思われる。これは家庭だけでは身に付けにくいものである。

前述の岡部らは、「演奏家が学校教育のとの協働においてアウトリーチ活動を行うことは、音楽教育の質を高め、学校教育の充実につながるなど、教育的効果が期待できると考える」とアウトリーチ活動の必要性を述べている。

音楽科教員に必要な要素は、指導力・専門性・人間性であることはいうまでもない。この3点は、前項で述べたWSLに必要な要素3点(音楽的技術、臨機応変な統率力、信頼性)と共通するのではないと思われる。

4.2 WSL研修から教員養成に生かせること

カーザの研修を、「WSLに必要なこと」としてまとめると以下の4つになろう。1つめは、技術面としてまず、プレスとアイコンタクトで「いつ、だれに、何を」伝えることが出来るようにすることである。必要以上の言葉を用いず、統率していく(音楽でいうところの指揮法のような)「指導力」である。2つめは、WSの内容は「サプライズ」と「一体感」を味わってもらえるよう工夫することである。3つめに「ストーリー性」と「時間配分」である。どこ(何)に向かって活動しているのか、そのために今自分たちは何をしているのかを明確に提示することが、「やる気」を出させ、「達成感」をもたらすためには大切であるということである。WS全体の流れは、「アイスブレイク(導入)から始まりメインの音楽活動、クールダウンの部分、まとめ」となり、あらかじめ決められた活動時間内に収めることも大切である。4つめは、WSLとしての人間性とお互いの信頼関係を高めることであった。

これらはまさに、教員養成にも同じことがいえる。技術面での指導力・統率力があるか。知的体験だけではなく「やる気」「一体感」「満足感」「達成感」という感動体験をもたらすような工夫が出来るか。

目的や目的意識を提示する力、授業をするための、時間配分を含めた計画性、教員間の人間関係など、教員として必要な資質と置き換えることが出来よう。

5. まとめと今後の課題と展開

5.1 新しい視点からの教員養成の指導法

WSLは、初めて会う児童生徒たちを前に、音楽を媒体として限られた時間で彼らを惹きつける。「やる気」を出させ、全体の統率を図りながら一体感・満足感・達成感をもたらす。その指導力を一瞬に発揮する必要があるWSLの立場と、担任として1年間を通してあらゆる角度から子どもたちを見守り、教育・指導する教員の立場とは、それぞれの背景は異なる。しかし、今回WSL研修という新たな視点から、教員養成について考える機会を得た。基礎知識や模擬授業、教育実習などに加えて、WSLの研修を取り入れてみることも提案したい。

5.2 これからの課題

文部科学省は、WSの企画・コーディネート・運営（指導や補助）が出来る専門的な知識を持った人材（=WSL）を養成しようとしている。このすべての要素をアウトリーチ活動やWSを行う演奏家側で実行することは、実際にWSの公演を行っている者として感じるに、なかなか難しいと思われる。

学校側の音楽科教員と演奏家の間に立って、より効果的な授業展開になる企画・コーディネート能力を持つ人材育成が急務であろう。

アウトリーチ活動の効果的な活用を追求し、音楽の持つ魅力を子どもたちに伝える授業の展開の出来る教員を養成していきたい。

引用文献

- ・岡部裕美・鈴木佳代子：「学校と演奏家の連携による音楽教育の可能性」千葉大学教育学部研究紀要、第58巻、2010年。p. 110, p. 119
- ・東京文化会館事業企画課：「東京文化会館ミュージック・ワークショップ」2016年。p. 2
- ・財団法人地域創造：『文化・芸術による地域政策に関する調査研究報告書「新・アウトリーチのすすめ」』2010年。p. 22

参考文献

- ・文部科学省ホームページ：「芸術表現を通じたコミュニケーション教育の推進」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/commu/1289958.htm（2016年11月27日参照）
- ・岡部裕美・鈴木佳代子：「学校と演奏家の連携による音楽教育の可能性」千葉大学教育学部研究紀要、第58巻、2010年。
- ・財団法人地域創造：『文化・芸術による地域政策に関する調査研究報告書「新・アウトリーチのすすめ」』2010年。
- ・東京文化会館事業企画課：「東京文化会館ミュージック・ワークショップ」2016年。